◆国際フォーラム基調講演　要旨◆

「武家の古都・鎌倉」の文化財の普遍的な価値について

今日、ここでお話しするのは、鎌倉の文化財の普遍的な価値についてだが、それを武家政権、あるいは武家文化というものの成長過程を通じて見ていきたいと考えている。その成長過程を通じて、その構成資産との関わり合いを中心にしながら、鎌倉がどのように成長して、それが現在にどのような影響を与え、あるいは、世界的に意味を持っているのかについて話したいと思う。

放送大学教授／東京大学名誉教授
五味文彦さん

◎武家政権と武家文化の形成について

日本社会に大きな影響を与えた武士は、9～10世紀頃から、各地で武者、あるいは兵（つわもの）と称され、自己武装した兵士･戦士として、その身分が形成され始め、兵の習いとか、武者の道などと称される主従関係に基づいた、独自の倫理を身につけた。この武士が、朝廷の軍事・警察部門を担う武家として成長するようになったのは、12世紀の頃からだ。12世紀後半になると、二つの内乱を経て、平氏が武家政権を形成した。京都の平氏による武家政権に対抗しつつ、鎌倉を根拠地にして、新たな武家政権を築いたのが源氏の長者である源頼朝だった。頼朝は、東日本に割拠する武士たちをまとめて、1180年に鎌倉に入り、平氏の武家政権を倒し、さらに、奥州・平泉の藤原氏をも滅ぼして、鎌倉に武家政権の基礎を築いた。

鎌倉に入った頼朝が、まずその中心に据えたのが鶴岡八幡宮である。源氏の祖先と一門とを、神や仏の信仰の両面から祀って護持する宗廟としての役割を担うのみならず、平氏の厳島神社への信仰に倣いつつ、それに代わるものとして、八幡信仰にこれを担わせた。八幡神は、武の神だけであるだけでなく、飢饉や疫病を救済する神・若宮としての性格を持って崇められていた。ここに鎌倉は、単に武士の都、武士の政権の根拠地というだけではなく、民衆まで集めた、都市への方向性を目指すことになった。

◎現在の日本文化の源流となる武家文化が整う

鶴岡八幡宮最大の祭礼である放生会に加え、相撲・流鏑馬・競馬（くらべうま）などの武芸が奉納されたことにより、武芸の様式が整えられ、やがてこれが、後の日本の武道である相撲･剣道･柔道などの源流になっていく。初詣を始めとして、鶴岡八幡宮で行なわれた神事や仏事など、幕府の御所を場とする年中行事と共に武家の年中行事を形成し、それはやがて、武士から民衆へと広がって、以後の日本人の年中行事に大きな影響を与えることになった。

海辺から鶴岡八幡宮への参詣道である若宮大路が整備され、鶴岡八幡宮は鎌倉の中心としてのみならず、東国の中心としても位置するようになった。鎌倉の港である由比ガ浜から、海の路、海路が東国地域を結び、鶴岡八幡宮からは陸路が鎌倉路として東国の各地を結んでいった。

鶴岡八幡宮の東隣には、幕府御所が構えられ、御所の東には荏柄天神が御所の鎮守とされ、御所の南には頼朝の父･義朝の冥福を祈る勝長寿院が建てられ、そして御所の東北には、武家を護持する御願寺として永福寺が建てられた。このように、御所の周囲は宗教空間の様相を示すに至ったものであり、鎌倉は極めて宗教色の強い政権の地として出発した。

頼朝によって、その基礎が築かれた武家政権と武家文化は、鶴岡八幡宮を精神的な核として鎌倉を場として成長していき、源平の争乱と奥州合戦の二つの戦乱を通じて、名誉と質実剛健を重んじ、家の結びつきを大事にして、将軍に忠誠を誓うという独特な精神と倫理を育んでいった。緊急時には、武士たちが鎌倉に駆けつける態勢が生まれ、鎌倉は東国の政治的・文化的中心となった。武家文化の基礎が、この頼朝の時代に築かれたということになる。

◎京の文化を取り入れ、開かれた都市へ

頼朝の死後、13世紀に入ると、頼朝の墓である法華堂が設けられ、また、頼朝の父・義朝が根拠地としていた亀ヶ谷に寿福寺が建てられ、そこには中国に渡って禅宗を日本にもたらした栄西が住持に迎えられた。

三代将軍・源実朝は、後鳥羽上皇が主導する朝廷の政治と文化に憧れ、和歌や蹴鞠の文化を鎌倉に持ち込んで、永福寺や勝長寿院、幕府御所などで会を持ち、学問についても、御所に学問所を置いて番を組んで知識ある武士を勤めさせて学んだ。

承久の乱後、幕府の政治支配は、この段階で全国に及ぶこととなるが、幕府は、武家政権としての自信と共に自覚を抱くようになり、京の政治と文化をより積極的に摂取して、自分のものにしていった。

それを推進した北条泰時は、幕府の執権の任に就くと、幕府御所を鶴岡八幡宮の前に移して、御成敗式目（貞永式目）など、後世に引き継がれる武家政治の方針を定めた。その際に政治を合議で決める評定衆たちは、仏教を守護する神、鶴岡八幡宮の八幡神、